

丹後機業の動き

景気「持ち直し」の動きも見られるが、和装市況は依然厳しいままである

- 現在の日本経済は、政府の景気刺激策や中国などアジア向け輸出の好調などから「持ち直し」の動きが見られ、景気二番底への警戒感もやや緩んできた。しかし、世界経済の今後の動向や政策効果の息切れ、企業のコスト削減の継続、デフレ基調の持続など不安要因も多く、本格的な景気回復への道筋はまだ見えてこない。
- 景気悪化による消費者心理の冷え込みに加え、小売店舗の縮小や改正割賦販売法の施行、上代の下落など和装市場を取り巻く環境は厳しさを増しており、和装業界は逆風に晒されることとなった。また、成人年齢を18歳まで引き下げようとの動きもある。こうなると18歳成人の多くは高校3年生となり、大学受験や就職活動に追われ振袖の購入・レンタルにまで手が回らないこととなる。
- 丹後産地では、和装販売の不振、流通段階での委託の蔓延などから消化(補充)仕入のための小ロット受注が大半となり、引き続き減産が止まらない。また、原材料の値上がりにもかかわらず製品価格への転嫁抑制圧力が強く、原料高・製品安となっており、産地機業の採算悪化は顕著である。
- こうした中、休廃業の増加や従事者の高齢化等による生産基盤の脆弱化が懸念され始めている。擦糸、紋紙、整経、機拵、製織、加工などの分業集合体として機能してきた産地であるが、近年では、その「ほころび」が目立ってきた。今後、分業種内での横の連携や、各分業種を貫く縦のグループ化、得意分野を持ち合った機業連合体構築などの取組が必要な時期にきていると思われる。
- なお、本年1月に国内の絹産地間連携として、全国24市区町村で構成する「シルクのまちづくり市区町村協議会」が設立され、府内からは京丹後市、宮津市、与謝野町、京都市が参加している。情報誌発行やウェブサイト開設、セミナー開催などが予定されており、連携・協力による新商品開発や新たな需要掘り起こし効果が期待される。

(調査時期：平成22年2月中旬～2月下旬)

(調査機関：(財)京都産業21 北部支援センター)

【ちりめん(白生地)】

- 平成21年(1～12月)の生産数量は、50.3万反で前年比76.6%(無地9.9万反・同66.6%、紋40.4万反・同79.6%)となった。年前半(1～6月)は前年同月比3割減で推移、年後半7月以降も1～2割減となり、年間を通し減産が止まらなかった。
- 平成22年1～2月の生産量については、7.8万反で前年比102.2%(無地111.7%・紋99.7%)となっている。無地では、2月に14ヶ月ぶりに月産1万反台を回復した。しかし、平成21年前半の悪さを考えると、まだまだ復調とは言えない。
- 財務省の貿易統計によると、平成21年(1～12月)の小幅白生地輸入数量(無地及び紋)は、39.4万反で前年比77.8%となった。年初より10月までは丹後産地とはほぼ同様に前年比3割減で推移したが、11～12月には一時的に同4割増となった。なお、平成22年1月は前年同月比1割減で、再び減少に転じた。今のところ、和装市況にまだまだ底打ち感なく、先行需要も不透明で期待薄なことから、今後も低位で推移していくものと思われる。
- 産地受注の大半は小ロットの消化(補充)仕入であり、また糸高・製品安から産地機業では売上・利益の両面で苦戦を強いられている。生糸価については、昨年夏頃から値上がりが顕著となり、確実にコストに跳ね返っているものの、ある程度転嫁できているのは一部の無地(四丈物三越など)に限られ、紋生地では価格・引合ともに非常に厳しい環境下にある。振袖は、近年輸入物に大きく移行してきており、またインクジェットで作った感も否めない。機業経営者の方に平成22年の抱負を伺ったところ、「今一度、ゼロからスタートするくらいの気合いで取り組まなければならない」「産地の状況も大きく変わってくる、今は損を避けてじっと耐える時期である」「厳しい状況ではあるが、極力機を動かして京都筋に“丹後の元気なところ”を見せたい」といった声がかかれた。

【帯地】

- 平成21年(1～12月)の西陣帯地生産数量は、74.7万本で前年比86.1%となった。平成10年に200万本を割り込んだ生産数量は、この10年余りで更にその4割以下にまで減少したことになる。
- 産地では、振袖用ハデ帯を製織する一部機業で健闘している他は総じて低迷しており、西陣の在庫調整や高中級品の販売不振等から受注確保に苦労するなど、未だ減産に歯止めがかからない。
- 工賃については、引き続き厳しい状況にある。多品種・小ロット注文が多く以前に比べ製織に手間がかかるものの、販売不振や上代の下落、値頃品中心の荷動きが見られる現況にあっては、工賃の値切攻勢は依然強く工賃安の流れに変わらない。

【広幅織物】

- 服地では、正絹は相変わらずスポット的な受注しかない。ポリちりは実需減が止まらず、平成21年生産は前年比2～3割減産となるなど、引き続き先細り状態にある。ポリちり製品に売筋商品が見出せない中において「ポスト・ポリちり」の出現が待たれるところである。
- ネクタイは、現在、春物の追加発注に応じている。しかし、クールビズや景気悪化、更に完成輸入物の増加により、発注量は減少している。
- カーシートは、昨年前半の無発注の反動やエコカー減税等の効果もあり、昨年9月以降徐々に注文が入ってきた。2月は、機業の減少や決算期前の駆込み需要等もあり、フル稼働状態にある。

【小物他】

- 風呂敷では、正絹は実需分のみ低位で推移しているが、インターネット直販が好調な機業も一部にある。レーヨンは前年比3割減産が続いている。
- 帯揚、衿等の小物は、和装不振そのままに、低迷している。なお、衿では中国産値頃品が目立つ。

